

2019年度

日本万国博覧会記念基金 助成先の事業紹介

今年度助成の43事業の中から、事業者から寄せられた報告をご紹介します。

重点助成事業

おさふね

備前長船日本刀展覧会

事業者：日本美術技術博物館マンガ館（ポーランド）

交付決定額：640万円

実施期間：2019年11月23日～2020年3月1日（100日間）

実施場所：ポーランド共和国クラクフ市・日本美術技術博物館マンガ館
（Manggha Museum of Japanese Art and Technology）

備前長船刀剣博物館所蔵の利恒（としつね／古備前：鎌倉初期）を始めとする備前刀31振と、現代刀匠による作品6振および5振の拵（こしらえ／柄や鞘など）が出展され、クラクフ市民はもとよりポーランドの人々の強い関心を集めています。特に開会式翌日から2日間開催された、長船町からの派遣団員による日本刀を理解するための講演『剣客の辿り着いた境地』、『日本刀の歴史』、『タタラ製鉄』、『作刀工程』、『刃紋と地肌の美』、『拵えと刀装具』、『鑑賞ポイントとマナー』は、会場一杯に詰めかけた聴講者の日本刀への興味をさらに高めました。また、同時に行われた「研ぎ」、「彫金」、「折り返し鍛錬と焼き入れ」の実演は、来場者の目を釘付けにしました。中でも鍛錬と焼き入れは、澄んで凍てつく闇に舞う炎が幻想的で、刀匠方の鎚を打つ躍動的な姿と相まって、「静と動」の作業風景が来場者を魅了。実演が終了しても質問が相次ぎ、人々が立ち去ろうとしなかったほど強い感動を与えました。

展示会場は全体の照明を少し抑さえ気味にし、スポットライトで刀を浮かび上がらせる工夫をしました。そして長船町からの派遣団の方々により角度を調整して据えられた刀身は、濃い紫色がかかったグレーの背景により美しさや刃



鍛刀の実演

紋の冴えが際立ち、来場者は個々の刀の前で長く見入っていました。

私たちは今回の展覧会が、日本刀の持つ深い魅力の中に、剣道、柔道などの武道はもとより茶道、華道、能などに共通するもの、あるいはその根底にあるものを少しでも感じ取ってもらう機会になればと思っています。

2019年11月30日には、日本大使を始めとする多くの方々のお出席をいただき、Manggha館創立25周年、両国国交樹立100周年の記念式典を盛大に挙行することができました。また、翌日の「Mangghaデー」に開催された備前長船博物館館長によるギャラリートークにも多くの参加があり、『備前長船日本刀展覧会』は連日好評を博しています。

長年の夢でもあった日本文化の象徴でもある日本刀の展示会が、瀬戸内市の武久顕也市長のご理解や全日本刀匠会のご協力により、記念すべき年に実現できたことは、この助成が今後の両国の文化交流の新たな1ページに貢献したという思いを強くしました。



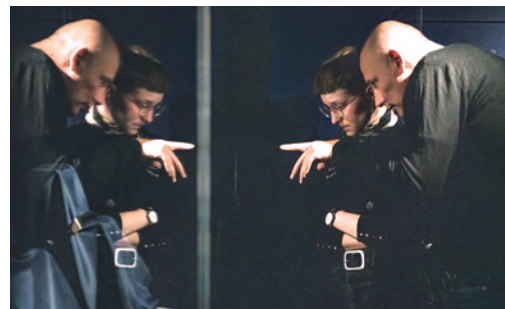
ボグナ・ジェフチャルク=マイ館長による開会式挨拶



焼き入れの実演



講義・実演風景（鑑賞方法）



展示された日本刀に見入る来館者

ビヨントゥモロー「アジアサマー・プログラム2019」

事業者：一般財団法人 教育支援グローバル基金
 交付決定額：200万円
 実施期間：2019年4月1日～10月31日
 実施場所：タイ、シンガポール、インドネシア

ビヨントゥモローは、親との死別・離別や、児童養護施設や里親家庭に暮らすなどの困難を経験した若者を応援する奨学金事業と、人材育成事業を行っています。毎年夏には、人材育成事業の一環として、アジアでのプログラムを開催しています。2019年は奨学生の中から選ばれた8名の大学生が東南アジアを訪問し、「自立支援」をテーマに学びを深め、社会的に弱い立場にある人々に対する取り組みを知り、参加者自身がテーマに対する自分の社会的役割を考える機会となりました。

タイでは、山岳民族出身の同年代の若者と寝食を共にし、フィールドワークとして現地幼稚園やパヤオ大学を訪問。支援団体、在タイ日本大使館、国連機関も訪問し、各所で活動する

方々と交流・議論し、東南アジアにおける自立支援の形を模索しました。



ホームステイ先の学生たちと(タイにて)

最終日にはプログラムの集大成として、シンガポールにて、自立支援のために自分たちに何ができるかについて英語によるプレゼンテーションを行いました。

約2週間にわたるプログラムを通して、参加学生たちはタイ、シンガポール、インドネシアの3か国を訪問し、児童養護施設や学生寮に暮らす若者や運営スタッフ、現地の大学の学生や教員など200名近くの方々に活動に参加いただきました。

「日本文化体感プログラム」を通じた首都圏留学生との交流事業

事業者：歴史街道推進協議会
 交付決定額：240万円
 実施期間：2019年8月5日～8日、9月2日～5日
 実施場所：東京大学(東京都)、伊勢神宮(三重県)、東大寺、興福寺(奈良県)、平等院、伏見稲荷大社(京都府)

参加者は、日本がいかにか海外文化を吸収し、独自文化に昇華させてきたかについて事前に東京で講義を受けた後、歴史街道のルートを辿り、仏像や建築など、日本の歴史・文化を体感しました。専門ガイドの説明を受けながら伊勢、奈良、京都を巡り、地元大学生とも交流。最終日に実施されたワークショップでは、参加者全員が今回のプログラムで学んだことをおさらいしました。

参加人数は7か国34名(首都圏留学生29名、地元学生5名)。厳しい暑さの中での開催でしたが、留学生たちには、日常の学業を離れ、日本の歴史・文化に存分に親しんでいただきました。日本の歴史・文化を積極的に吸収しようという意欲が感じられ、「自国文化との共通点、相違点を見出し、日本

への関心を一層深めた」との感想もいただきました。また、地元学生と様々なことについて話げできたことも良かったとの評価をいただきました。



東大寺にて

日本、特に関西の歴史・文化を理解してもらう活動は全国に広めていく必要があり、首都圏留学生を対象としたプログラムの実施を数年来目指してきましたが、財政的な制約で実施に至っていませんでした。今回は、留学生の皆さんに、より深く日本の歴史・文化に触れる機会をもていただくことができました。

第2回東京国際合唱コンクール

事業者：一般社団法人 東京国際合唱機構
 交付決定額：240万円
 実施期間：2019年7月26日～28日
 実施場所：第一生命ホール(東京都)

第2回目の開催を迎えた本大会は、世界中から予選審査を通過した全57団体、約2,000名の出演者と、のべ3,000名を超えるお客様が東京・晴海に集結し、昨年以上の盛り上がりとなりました。総合プロデューサー・芸術監督の松下耕さんが35年間の音楽活動を経て実現した大規模な国際合唱コンクールが、2年連続でこのように賑々しく開催でき、我々の追い求める「理想」に限りなく近いコンクールが実施できました。

当コンクールは、単に競い合うだけのコンクールではなく、異文化を理解し、国や人種、言語、宗教、すべての境界を超えて人々が平和を分かち合う、平和の祭典でもあります。開催期

間中は、ホールにもロビーにも、出演者やご来場のお客様



開催風景

様、スタッフの笑顔が溢れていました。お越しいただいた皆様には、きっと様々な面で、お楽しみいただけたことと思います。

第3回は、2020年9月19日～22日に開催の予定です。すでに世界的な素晴らしい国際審査員とゲストクワイアを招聘し、現在、さらなる発展、賑々しい開催を目指して準備を進めています。

国際セミナー「発展途上のアフリカ諸国における社会経済的変革と日本」

事業者：フェリックス・ウフェ・ボワニ大学 CIRES 経済政策分析センター

交付決定額：170万円

実施期間：2019年8月29日

実施場所：法政大学ボアソナードタワー 26階スカイホール

本事業は、2019年8月28日～30日まで横浜市内で開催された第7回アフリカ開発会議（TICAD 7）のパートナー事業として、コートジボワールのフェリックス・ウフェ・ボワニ（FHB）大学 CIRES 経済政策分析センターと法政大学国際日本学研究所の共催によって行われました。在コートジボワール日本大使館と国際交流基金の支援によって、FHB大学でこれまでに西アフリカ諸国と日本が参加する「フランス語圏アフリカ日本研究国際会議」が2回開催されており、今回は3回目となります。

セミナーでは、ブルキナファソ、コートジボワール、セネガルなど西アフリカ諸国6か国から来日した9名の研究者と日本から法政大学の水野和夫教授など4名、計13名が報告を行いました。1～2回目の主テーマが「文化」だったのに対して、今回は

「経済」の切り口から日本の知見をアフリカ開発にどう活かすかを中心に活発な議論が展開されました。

この研究会は、近い将来にアフリカ初となる「日本研究センター」をFHB大学内に設け、そこを拠点にしてアフリカ国内に「日本研究者」や「日本の良き理解者」を育てることを目指しています。2100年には世界人口の38%を占めると言われる巨大市場との交流を拡大していくためにも、アフリカでの日本理解の促進は欠かせません。



報告者13名を中心とした記念写真
(前列左から3人目がFHB大学アウレ教授)

強相関電子系国際会議 (SCES2019)

事業者：強相関電子系国際会議 (SCES2019) 組織委員会

交付決定額：240万円

実施期間：2019年9月23日～28日

実施場所：岡山コンベンションセンター（岡山県）

岡山で開催された強相関電子系国際会議は、1992年の仙台開催から世界各地で毎年開催されている国際会議であり、日本では5回目の開催となります。今回は、34か国から840名余りの研究者が集まり、近藤効果、高温超伝導、量子磁性体、トポロジカル物質などについて研究発表や議論を行いました。これらの研究は、人類の持続可能な発展を可能にする産業と技術革新の基礎となるものです。

5日間の会期中、187件の講演が4つの会場で行われ、さらに597件のポスター講演も行われました。また、若手研究者2

名と発展途上国の1名の研究者の優れた業績に対して表彰を行いました。

参加者のほとんどは会議場から徒歩圏内のホテルに滞在し、研究に集中した有意義な時間を過ごしました。340名の海外からの参加者の中では、特に韓国と中国を中心としたアジアからの若い研究者の参加が多かったのが特徴でした。



講演風景

ブルガリア・日本「3つの周年」記念事業 大地と天を繋ぐ、調和への祈り ～ブルガリアン・ヴォイス × 笙の響き～ アンジェリーテ来日公演 2019

事業者：地球音楽プロジェクト実行委員会

交付決定額：240万円

実施期間：2019年9月29日

実施場所：すみだトリフォニーホール（東京都）

ブルガリアン・ヴォイスの世界的グループ「アンジェリーテ」の特別公演として、日本の雅楽器である笙のアンサンブル「星筐 Hoshigatami」をゲストに迎え、一夜限りのコラボレーション公演を実施しました。アンジェリーテのコンサートに加え、史上初となるコラボレーションとして3曲を新たにアレンジし演奏を行いました。ご来場者のアンケートでもこの共演が非常に好評で、多様な文化がそれぞれを尊重することで調和し、発展の未来を感じさせる新たな音楽文化体験として強い印象を残すことができました。

さらに、それぞれの音楽や文化への理解を深めるため、ブ

ルガリアン・ヴォイスのワークショップ、笙の体験コーナー、

ブルガリアの風景写真や、衣装の展示なども実施。1,136名が来場し、約30名がブルガリアン・ヴォイスのワークショップに、15組が笙体験コーナーにも参加しました。

異文化を調和させ発展させるといふ今回の公演趣旨は、万博理念に深く通じるところがあり、今後も意義ある事業を作り上げていきたいと思っております。



公演風景

※写真は各事業者より提供